日本語の「名詞＋助詞」と対照させた中国語の「介詞＋名詞」の学習法

――「視覚的」な中国語語順学習の方法の開発の一環として――

渡　邉　登　紀・劉　　志　偉

0. はじめに

日本語母語話者は日本語の語順の影響を受け、介詞と名詞の語順を逆にする、あるいは介詞を付け忘れる傾向がある[(1)]。本稿は、そういった日本語母語話者の傾向を踏まえた「介詞」の学習法について述べるものである。

現行の中国語教育文法では、例えば、介詞の「在」について次のように説明されている。

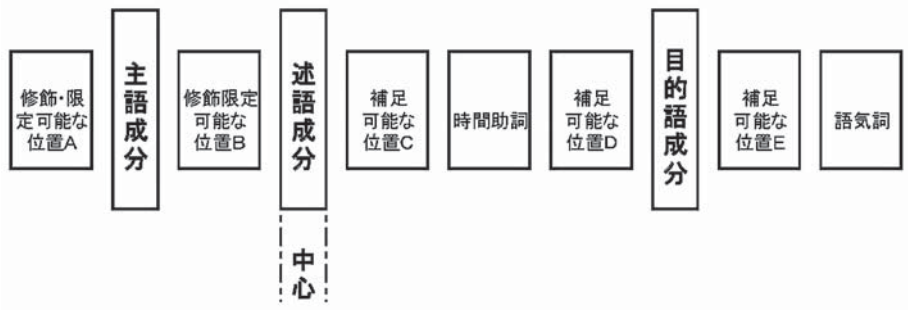
(1) 在图书馆看书。(図書館で本を読む。)

(2) 小王站在我面前。(王くんが私の目の前に立っている。)(刘月华 2001：544)

(3) 鲁迅一八八一年生于绍兴。(魯迅は 1881 年に紹興で生まれた。)(刘月华 2001：626)

(1) の動詞の前に前置される「在」は「介詞」、(2) の動詞に後置される「在」は「結果補語」、(3) の「于」は「介詞補語」であると説明されている。刘月华は「于」を「介詞補語」とする理由として「绍兴」は目的語ではないことを挙げているが[(2)]、(2) の「我面前」もまた目的語であるとは言い難く、少なくとも初学者にとっては、動詞に後続する「于」と「在」をそれぞれ「介詞補語」と「結果補語」とするその境界線は分かりにくいものとなっている[(3)]。

中国語は屈折のない言語とされており、その語順は、理論上「視覚的」に理解し、学習することができる。「視覚的」な語順の学習法とは、まず中国語における語順を順番の決まった、大きさの異なる箱の並びに例え、これらの箱に、単語やフレーズを書いたカードを入れていくように文を作成する学習法のことである。単文の語順は、単語やフレーズを文成分の構成要素と見なし、各文成分の順番を決めていく作業によって習得できる。複文に関しては、単文が文成分の大きな構成要素となっており、構成の形態によって鎖型、箱入れ型、両者の複合型の 3 つのタイプに分けられる。こうした体系的な理解の方法を踏まえ、「視覚的」に語順を習得するという考え方に基づき、劉（2008、2011）[(4)] は（図 1）のような学習用の文構造を提案した。



（図 1）

中国語にとって語順は極めて重要な意味を持ち、日本語が語順の変更に柔軟であるのとは対照的である。そのため、徹底した中国語の語順学習が日本語母語話者に必要であることはいうまでもない。本構造は孤立型という中国語の言語特徴に着目し、分かりやすくかつ効率的な学習を目指している。意味論と形態論の両方を兼ね備えた文法体系は理想的である。しかし、語学を学習する際、形態論から入るほうが理解しやすいのも事実である。 そこで、各種文法項目を一つに集約させて学ぶことのできる文構造を提案し、この文構造に従えば、さまざまな文の構造を視覚によって把握することが可能となることから、「『視覚的』な中国語語順学習の方法」と名付けることにした。「視覚的」に学習することのメリットは、(1) 学習者は個々の文法項目を学習する際に、自分が今どこを習得しているのかという位置づけを把握することができる、(2) この文構造を介することで、既習の個々の文法項目を学習者自身で組み合わせて作文するなどの応用力を養うことができる、以上の二点にある。

現在、日本で用いられている中国語教育文法は、中国国内の教育文法の体系をそのまま踏襲したものである。中国国内で通用される教育文法は、当然のことながら中国語の特徴を明示するのには適したものであるが、ただし、それが日本語母語話者にとって適したものであるかどうかという点についてはこれまで議論が行われてこなかったように思われる。日本語母語話者による中国語学習において、とりわけ初学者が中国語の語順を勉強する際に、構文特徴を異にする日本語の語順に影響を受けてしまう傾向があるため、それを克服する学習法が日本語母語話者に必要である。

本稿は、劉（2008、2011）が提案した学習用の文構造に従って、中国語の文構造における「介詞＋名詞」の語順関係を、日本語の「名詞＋助詞」に対照させて理解する学習方法を提案するものである。劉が提案した理論の実用化にあたって、理論の提案者でありかつ 中国語母語話者である劉と、中国語教育を実践する立場にありかつ日本語母語話者である渡邉によって、これまで討議を重ねてきた。本稿に記す内容は両者の討議を経て得た見解であり、どちらの見解であるか明確に区分できない面があるため、連名の執筆とした。ただし、最終的に両者の間の討議を文面にまとめたのは渡邉であり、文責は渡邉にある。

1. 初学者の誤用実例

冒頭でも述べたように、日本語母語話者は日本語の語順の影響を受け、介詞と名詞の語順を逆にする、あるいは介詞を付け忘れる傾向がある。以下に示す誤用例は、筆者の勤務校[5]における定期試験から収集したものである。（下線部は誤用部分を示している。）

(4) あなたのお父さんはどこから出発したのですか―父は成田空港から出発しました。

你爸爸出发哪儿？―我爸爸出发成田机场。
你爸爸出发哪儿？―爸爸去成田机场出发。
你爸爸从哪里出发？―爸爸出发从成田机场。
你爸爸从在哪儿出发？―我爸爸从成田机场出发。
你爸爸从是哪里的出发？―爸爸从成田机场出发。
你爸爸是哪里出发的？―爸爸从成田机场是出发的。
你爸爸是从哪儿出发的？―爸爸出发从成田飞机。

(4) は所謂「是…的」構文の運用の可否を問うために出題したもので、模範解答は「你爸爸是从哪儿出发的？爸爸是从成田机场出发的。」となる。上に示した誤用例は、「是…的」構文の運用はさることながら、「介詞＋名詞」の扱いにおいても躓いている。すなわち、日本語の「どこから（名詞＋助詞）」に相当する語句が「从哪儿（介詞＋名詞）」となること、さらに、その「从哪儿（介詞＋名詞）」は動詞に前置しなくてはならないこと、この二点に混乱が生じていると思われる。

(5) 美術館で写真を撮ってもいいですか？

[　] 内の語を簡体字に直し、正しい語順に並べ替えて、文を完成させなさい。ただし、[　] 内には不要な語が一つ入っています。
[néng, měishùguǎn, zhàoxiàng, kěyǐ, ma, zài,]？

美术馆能可以照相吗？
美术馆能可以照写吗？
美术馆能可以写真吗？
美术馆能在可以吗？
美术馆能写可以吗？
美写馆能照相可以吗？

美术馆在可以（空白）吗？

美术馆在相照可以吗？

在美术馆能做写真吗？

在美术馆可以照想吗？

可以在美图馆扬写吗？

能照相在美术馆吗？

（5）は中国語の語順および助動詞「能」「可以」の使い分けを問うもので、模範解答は「在美术馆可以照相吗？」となる。しかし、これも（4）同様に、誤答者の多くが「能」「可以」の選択以前に、「美術館で（名詞＋助詞）」に相当する「在美术馆（介詞＋名詞）」の介詞「在」を付け忘れるところから、躓いてしまっている。

（4）および（5）の誤用例に見えるように、介詞句の誤用は、文全体の語順の混乱を引き起こす大きな要因となっている。言い換えれば、介詞句の運用の定着が、初学者（日本語母語話者）の中国語運用能力の向上における重要な関門となっているのである。

2.「介詞＋名詞」のセット

先に示した誤用を克服するためには、日本語の特徴を考慮したうえで中国語の語順を理解するのが効果的である。そこで、本稿では「介詞＋名詞」のセットを用いての学習を提案したい。

セットとは、介詞の後ろに、一般名詞や代名詞のほか、名詞相当のフレーズが下接し、述語成分に関わる時間・空間（場所／方向）、手段・方法・道具、対象・焦点、根拠・目的・原因などを明示する「介詞＋名詞」の形である。この中国語の「介詞＋名詞」を日本語の「名詞＋助詞」に対照させるにあたって、「介詞＋名詞」と述語成分との位置関係を整理させておく必要がある[6]。

日本語は構文的に修飾と被修飾の関係を成すとされているため、「名詞＋助詞」のすべてが述語成分に前置される。これに対し、中国語では「介詞＋名詞」には述語成分の前に現れるもの（連用成分）とその後ろに現れるもの（補語成分）とがあるからである。「介詞＋名詞」は専ら述語成分の前に現れるもの（before）、専ら述語成分の後ろに現れるもの（after）、述語成分の前にも後ろにも現れるもの（both）の三つのタイプに分けることができる。それぞれのタイプに、どのような「介詞＋名詞」が分類されるかについては、「介詞＋名詞」セット一覧表を参照されたい。この一覧表が示しているように、「介詞＋名詞」の多くが専ら述語成分の前に現れる（before）タイプに分類される。ゆえに、初学者に対しては、「介詞＋名詞」の大半が述語成分に前置されるということの理解の定着を図ったのちに、残りの二つのタイプについて学習するのが効果的であると思われる[7]。

「介詞＋名詞」セット一覧表

位置	介词＋名词	カテゴリー	用例
before	从＋名词	時間・空間（起点／距離・範囲など）	从这儿一直走。（陳 1：45）
	离＋名词	時間・空間（起点／距離・範囲など）	售票处离这儿远吗？（徐 1：104）
	朝＋名词	方向 1（経路）	他朝我微微一笑。
	冲＋名词	方向 1（経路）	她不知为何突然冲我大声喝叫起来。
	沿＋名词	方向 1（経路）	沿（着）这条大道一直走就到。
	来＋名词	方向 2（従来の連動文）	我来＜场所名词＞买菜。
	去＋名词	方向 2（従来の連動文）	姐姐去＜场所名词＞洗衣服了。
	回＋名词	方向 2（従来の連動文）	他准备回上海找工作。
	对＋名词	対象・目標	以后得小心啊！我对自己说。（絹川 2：33）
	和＋名词	対象・参与者	我和几个朋友打算去泰山看日出。（徐 2：54）
	跟＋名词	対象・参与者	我也跟你一起去吧。（葉 1：55）
	同＋名词	対象・参与者	我同你一块儿去也没问题。
	与＋名词	対象・参与者	眼前的现状与三年前几乎无法可比。
	比＋名词	対象・目標（従来の比較構文）	北京的冬天比东京冷吗？（葉 1：89）
	像＋名词	対象・目標	他像只猴子似的嗖的一下就爬到了大树上。
	关于 1+ 名词	対象・目標	关于研讨会的内容，您能不能给同学们介绍介绍？（瀬戸口他：56）
	对于 1+ 名词	対象・目標	对于这些问题要进行具体分析。（刘月华 2001：265）
	至于 1+ 名词	対象・目標	你安心疗养，至于工作，就不要操心了．（相原編 2010：2040）
	除＋名词	対象・目標	除你我谁都不想见。
	除了＋名词	対象・目標（従来の接続詞）	我除了学习还要打工。（葉 2：38）
	替＋名词	行為の受益者	明天我可以替你去。（葉 2：38）
	为（四声）＋名词	行為の受益者	妈妈总是为我担心。（徐 2：63）
	为了＋名词	目的・原因（従来の接続詞）	为了减肥，她每天早上跑步。（徐 2：63）
	由于＋名词	目的・原因（従来の接続詞）	由于时间的关系，我们取消了这次活动。（相原編 2010：1917）
	因为＋名词	目的・原因（従来の接続詞）	因为上次的失败他就再也没能振作起来。
	帮＋名词	行為の受益者	以后星期六我帮你学习日语吧。（徐 2：42）
	陪＋名词	行為の受益者	别担心，我陪你去修理。（徐 1：92）
	作为＋名词	基準表示	作为地球人，应该保护好环境。（三潴 :83）
	用＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	那你们多用汉语交谈吧。（徐 2：10）
	拿＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	印度人直接拿手吃咖喱饭。
	坐＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	我坐巴士去学校。（徐 1：29）
	乘＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	明天大家还是乘公共汽车去吧！
	开＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	我们开车去，还是打的去？（徐 2：106）
	打＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	我们开车去，还是打的去？（徐 2：106）
	骑＋名词	手段･方法･道具（従来の連動文）	高中生禁止骑摩托车上学。（葉 2：42）
	按＋名词	手段・方法・道具	就按你们的标准算吧。

before	按照 + 名词	手段・方法・道具	按照规定我们没法给你出证明。
	以 + 名词	手段・方法・道具	以她的眼光怎么会看得上他呀！
	凭 + 名词	手段・方法・道具	凭他的本事弄张门票太简单了。
	根据 + 名词	手段・方法・道具	根据现在的情况来看，还有解决的可能性。
	据 + 名词	手段・方法・道具	据他说下个星期他就要去美国留学了。
	依据 + 名词	手段・方法・道具	依据当地习俗，晚上不能剪指甲。
	依照 + 名词	手段・方法・道具	必须依照法律对罪犯进行严惩。
	通过 + 名词	手段・方法・道具	通过这次比赛小选手们得到了不少收获。
	对比 + 名词	手段・方法・道具	对比十年前的照片，这一地区发生的翻天覆地的变化。
	趁 + 名词	手段・方法・道具	趁现在还有一些时间赶快收拾一下吧！
	把 + 名词 (8)	焦点表示	我把书交给老师了。（葉 2：22）
	连 + 名词	焦点表示	这件事连你妈妈也反对吗？（徐 2：75）
	由 + 名词	焦点表示	下面，由留学生代表大山一郎发言。（絹川 2：140）
	是 + 名词	焦点表示	是我是学生。（望月 1999：210）
	对于 2+ 名词	背景や話題の提示	对于这些青年人来说，没有克服不了的困难。（相原編 2010：436）
	就 + 名词	背景や話題の提示	就他现在竞技水平而言，这场比赛的结果不言而喻。
	关于 2+ 名词	背景や話題の提示	关于这个问题有多种解决方式。
	至于 2+ 名词	背景や話題の提示	至于能否最终解决这个社会问题，专家们认为首先必须保证当地居民的基本生活水平。
after	成 + 名词	事実としてのまたは予想される結果、目指す目標・到達点	其实，刚才我听错了广播，把七号站台听成了一号站台，差点儿坐错车。（絹川 2：80）
	为（二声）+ 名词	事実としてのまたは予想される結果、目指す目標・到達点	中国一共有 41 处被联合国教科文组织认定为“世界遗产”。（瀬戸口他：66）
both	在 + 名词	時間・空間（起点・所在位置）	我上午十点在校门口等你。（葉 2：12）
		結果性事実としての時間・空間	太好了，写在我的本子上吧。（岡田 1：98）
	于 + 名词	時間・空間（起点・所在位置）	为了帮助哈尼族脱贫，同时也为了保护哈尼梯田，国家于 2012 年决定把“红河哈尼梯田文化景观”申报世界文化遗产。（三潴 :88）
		結果性事実としての時間・空間	抹茶源于中国隋朝，唐朝、宋朝都很流行。（瀬戸口他：54）
	自 + 名词	時間・空間（起点・所在位置）	自认识你以后他的人生观发生了巨大的变化。
		結果性事実としての時間・空間	参加本次运动会的选手来自五湖四海。
	到 + 名词	方向 1（経路）	我想到日本人的家里去看看。（葉 2：16）
		結果事実・目指す目標としての位置・方向	我要把这个包裹寄到日本，邮费多少钱？（絹川 2：128）
	向 + 名词	方向 1（経路）	不要悲观，要向前看。（徐 2：87）
		結果事実・目指す目標としての位置・方向	为了维持生计，渔民们被迫驶向更远的海域。（三潴 :40）
	往 + 名词	方向 1（経路）	我要往日本打国际长途。（楊 2：39）
		結果事実・目指す目標としての位置・方向	请问，这是开往上海的 T107 次车吧？（絹川 2：80）
	给 + 名词	対象・目標	你得给我当导游啊。（岡田 1：98）
		結果事実・目指す目標としての対象・目標	把日中辞典借给我用一下，好吗？（楊 1：106）

劉（2008、2011）が提案した学習用の文構造（図１参照）にあてはめて「介詞＋名詞」の位置を「視覚的」に提示することによって、個々の文法項目の体系的な理解を促すことができる。例えば、初級中国語テキストに必ず取り上げられる学習項目である比較表現は、初学者にとって語順のミスを犯しやすい項目でもある。

（6）昨日より今日は寒い。

○今天比昨天冷。
×昨天比今天冷。

こういった誤用を避けるためにも、「介詞＋名詞」のセット学習は有効である。比較表現も「介詞＋名詞」のセットを用いた構文の一つであること、すなわち「名詞＋より」（「名詞＋助詞」）に相当する「比＋名詞」（「介詞＋名詞」）が述語成分の前に配されるということを「視覚的」に理解することによって、比較表現の構文を覚えるという手間が省略できるからである。あるいは、「差五分十二点（12時５分前）」といった語の構造にも「介詞＋名詞」のセットは応用できる。この表現は学習者にとってその語順につまずきやすい箇所であるが、「差」を介詞、「十二点」を目的語とみれば、［「介詞＋名詞」＋述語成分省略＋目的語］という構造の中で「視覚的」に理解できる[9]。個々の文法項目について個々にその語順を学習するのではなく、より効率的に一つの文構造に包括して学習するために、本稿は介詞を単独で取り扱うのではなく、「介詞＋名詞」のセットとして日本語の「名詞＋助詞」と対照させて学習することを提案するのである。

3. 連動文

先に例に挙げた比較表現に続いて、初級中国語の必須学習項目である連動文についても、述語成分に前置される「介詞＋名詞」の枠組みの中で解釈することが可能である。

「連動文」とは、例えば「一つの主語に対し接続詞やコンマを使わず、二つ（あるいは二つ以上）の動詞を連続して使う」「連続する動作の順序は変更できない」構文であると一般的に理解されている[10]。だが、実際には「連続する動作」と言っても、いかなる動詞によってでも連動文を作ることができるというわけではなく、 一つ目の動作に用いることのできる動詞の範囲は限定されている。そこで本稿では、それらを「行き先を表す『介詞＋名詞』」と「手段・方法・道具を表す『介詞＋名詞』」として説明することを提案したい。その詳細は以下に示す通りである。

3.1. 行き先を表す「介詞＋名詞」

中国語の介詞の多くは動詞に由来し、現代中国語でも介詞と動詞が同形のものが少なくない。たとえば、

(7) 在学校。(学校にいる。)

(8) 在学校打球。(学校で球技をする。)

前者の「在」が動詞であるのに対し、後者の「在」は介詞とされている。しかし、介詞と「動詞との境界」(針谷 1996)[11] は必ずしも明確ではなく、動詞の特徴を持ち合わせている介詞も少なくない。

(9) 去学校打球。(学校に球技をしに行く。)

(8) の「在」を「去」に置き換えたものが (9) である。「在学校」が「学校で」と、場所のみを単純に表していたのに対し、「去学校」は「学校へ…しに行く」と行き先を表し、前者は「介詞+名詞」、後者は「連動文」構文を構成する「動詞+名詞」であると解釈される。

初級中国語での必須学習項目である「連動文」は二つのタイプに分類され、一つは (9) のような一つ目の動作とされるところに「来」「去」を用いるものであり、もう一つが後述する「我坐巴士去学校(私はバスで学校に行く)」に類するタイプのものである。これらの「連動文」はいずれも、行動を行う(あるいは行った)順に動詞およびその目的語を配列するように指導されるのが一般的である。しかし、「映画を観に行く(去看电影)」を中国語に訳す際に、その日本語の語順の影響を受けてしまい、「看电影」の後に「去」を添えてしまう「看电影去」、あるいは「看」と「电影」の間に「去」をいれた「看去电影」という誤用が、初級中国語学習者の間ではしばしば起こっている。ゆえに、本稿では、この連動文を「視覚的」に理解するための補助線として、「来+場所名詞」「去+場所名詞」を述語成分に前置される「介詞+名詞」と見る解釈を提案するのである。ただし、「来/去+場所名詞」では場所名詞が省略されることもしばしば起こるため、これについては「介詞+名詞」とは異なる点として注意が必要である[12]。

(10) 姐姐去买了三个苹果。(姉は三つのりんごを買いに行った。)

(11) 星期天我去新宿买了一些衣服, 因为是周末人特别多。(日曜日に私は新宿に服を買いに行ったら、週末だったから人が特に多かった。)

「来/去+場所名詞」を「介詞+名詞」として理解することのメリットは、アスペクト助詞「了」の運用の際にも得られる。通常、連動文には動詞が二つ以上存在するため、いずれの動詞に「了」を付すかは、学習者にとって誤用を犯しやすい箇所である。だが、連動文が「介詞+名詞」と述語成分から構成されていることを「視覚的」に理解しておけば、アスペクト助詞「了」は必然的に述語成分に相当する二つ目の動詞に付すべきだと判断でき、「了」の誤用の抑止力となるのである。

3.2. 手段・方法・道具を表す「介詞＋名詞」

次に、「手段・方法・道具」を表す連動文について見ていきたい。

（12）我坐巴士去学校。（私はバスで学校に行く。）（徐 1：29）
（13）我们开车去，还是打的去？（私たちは車で行く？それとも、タクシーで行く？）（徐 2：106）

（12）において、一つ目の動作に相当する「坐巴士」は「バスに乗って」と「坐」が動詞として訳出しても、「バスで」と「乗る」を省略して「名詞＋助詞」の形で訳すことも可能である。そのため、中国語から日本語に訳す際には、さほど苦も無く訳せる学習者が、日本語から中国語に訳す際に戸惑うケースがしばしば起こる。つまり、「バスに乗って学校に行く」の対訳であれば「我坐巴士去学校」と中国語に訳すことが出来るが、「バスで学校に行く」という日本語から中国語に訳すとなると、日本語表現上で「行く」以外の動詞が見えないために「坐」を補えないという事態が発生するからである。

交通手段を表すセットに「坐＋名詞」「乗＋名詞」がよく使われる。この場合の名詞は乗り物に限られるが、乗り物を表す名詞は「坐中央线（中央線で）」のように具体的な交通機関であっても構わない。また、「坐＋名詞」「乗＋名詞」の応用として、「开自家车（自家用車で）」「打出租车（タクシーで）」「骑自行车（自転車で）」といった表現が挙げられる。これらは、日本語では全て「（乗り物）で」という表現に集約できるが、中国語においては自らが運転するのであれば「开」、タクシーであれば「打」、二輪車であれば「骑」などと言ったように乗り物の種類によって介詞を使い分ける必要がある。そのため、日本語母語話者にとって、これらを日本語の「（乗り物）＋で」に対照させて「介詞＋名詞」のセットを習得する方法は有効である。

（14）是用日语写，还是用汉语写？（日本語で書きますか？それとも中国語で書きますか？）（葉 2：36）
（15）印度人直接拿手吃咖喱饭。（インド人は直接手でカレーを食べます。）
（16）你告诉他吗？我打电话告诉他。（彼には伝えますか？　電話で彼に伝えます。）
（17）你告诉他了吗？我写信告诉他了。（彼には伝えましたか？手紙で彼に伝えました。）

いずれも、日本語ではしばしば「名詞＋で」と表現されるものである。ゆえに、日本語の「手段・方法・道具を表す名詞＋で」と対照させて、（14）（15）のような「用／拿＋道具を表す名詞」のセット、その応用として（16）（17）のような伝達手段を述べる際には「打电话（電話で）」「写信（手紙で）」などのセットとして学習することを推奨したい。セットでパターン学習をすることによって、先述の交通手段を述べる「乗り物＋で」のケースと同様、連動文における「一つ目の動詞」の脱落を防ぐことができる。

この章では「介詞＋名詞」を用いた連動文の構文解釈を二つのタイプに分けて示してきたが、本稿の主旨が連動文という構文を否定することにあるのではないことは述べておく必要があるだろう。本稿は学習者が「視覚的」かつ体系的に語順を把握できることを目的としており、これらの解釈はあくまで連動文を理解するための補助線として提案するものである。

4. 結びにかえて

本稿は、劉（2008、2012）がこれまで提言してきた述語成分を中心に据えた中国語の「視覚的」な語順学習という体系の中で、「介詞＋名詞」を捉え直すものである。膠着語である日本語とは異なり、中国語にとってその語順は極めて重要な意味を持つ。そのため、徹底した中国語の語順学習が日本語母語話者には必要となる。

劉（2008、2012）は、その語順学習をより効率的に行うために「視覚的」な語順学習の開発を行ってきた。それは、個々の文法項目に応じて個々の公式を示すことを目的とするものではなく、個々の文法項目を包括的に把握できる体系を見出すことに主眼がある。本稿の中で、初級テキストにおける必須学習項目とされる「比較表現」や「連動文」などの構文も「介詞＋名詞」の枠組みの中での理解への可能性について述べてきたのも、そのためである。これによって、これらの学習項目が、独立したそれぞれの構文（語法ポイント）としてではなく、その全体像を「視覚的」に理解することが可能になるだろう。それは実用面において、語順の乱れや介詞の不足といった日本語母語話者が犯しやすい誤用の抑止力として役立つはずである。本稿では触れなかった述語成分の後ろに現れる「介詞＋名詞」(after)、述語成分の前にも後ろにも現れる「介詞＋名詞」(both)については続稿で述べることにしたい。

注

（1）　盧濤 2005（〈汉语介词使用错误分析〉《北研学刊》第 2 号 82 頁）では「介词脱落」と呼んでいる。

（2）　刘月华等 2001《实用现代汉语语法（增订本）》、商务印书馆、626 頁

（3）　動詞に後続する「在」を結果補語として解釈されるのは無論一理があるが、これを他の介詞補語と呼ばれるものと一括しても整合的に捉えられるため、筆者は従来の説明に対して批判的な立場を持つ。日本語母語話者にとってはむしろ「介詞＋名詞」が動詞に後続するタイプを介詞補語としたほうが他の介詞補語と整合的にまとめられ、分かりやすいと思われる。なお、介詞補語を他の補語と体系的に捉える点については劉（2008）を参照されたい。

（4）　劉志偉 2008「日本人の中国語勉学に関する小考（続）」(『かりん』創刊号、京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)、劉志偉 2011「中国語における文の中核的な述語に先行する要素の配置について」『類型学研究』3、類型学研究会）

（5）　日本大学生物資源科学部

（6）　中国語の場合、名詞のほかに形容詞なども後続する場合がある。たとえば、“从小认识（小さい頃から知っている）”がそれである。この場合、形容詞を名詞相当と見なすことができるからである。なお、

日本語においても「思ったより」のような形がある。これが中国語の“比想像的”に訳されることを確認しても分かるように、ここの「思った」は「思ったこと・もの」の意を表しており、動詞の準体用法と言えるのである。

（7）なお、本稿では、「介詞＋名詞」は専ら述語成分の前に現れる（before）のタイプを中心に考察し、残りの2タイプ、とりわけ述語成分の前にも後ろにも現れるもの（both）については続稿で論じる予定である。

（8）「把」構文も「介詞＋名詞」セットとして分類できる。詳しくは劉志偉 2012「中国語の把構文の習得について」（『歴史文化社会論講座紀要』9、京都大学人間・環境学研究科）を参照されたい。

（9）述語成分を伴う例に「差五分就是十二点了。（あと5分で12時になるよ。）」が挙げられる。本研究においては名詞述語文を認めない立場をとっている。詳しくは劉 2011（注2）を参照されたい。

（10）徐送迎 2013『たのしくできる We can! 中国語 初級』朝日出版社 31頁

（11）針谷壮一 1996「介詞の下位分類について」『中国語学』243、日本中国語学会

（12）わかりきった情報で場所名詞を不問とする場合、あるいは場所名詞が不詳な情報の場合に、言語における経済原則により省略される。

【参考辞書／教科書】

相原茂 2006『日中辞典』講談社
相原茂 2010『中日辞典』（第3版）講談社
岡田英樹他 2010『新コミュニカティブ中国語 Level1』郁文堂（岡田1）
絹川浩敏他 2010『新コミュニカティブ中国語 Level2』郁文堂（絹川2）
徐送迎 2013『たのしくできる We can! 中国語　初級』朝日出版社（徐1）
徐送迎 2013『たのしくできる We can! 中国語　中級』朝日出版社（徐2）
瀬戸口律子ほか 2013『中国文化の輪－一歩すすんだ中国語－』（瀬戸口他）
陳淑梅・劉光赤 2010『しゃべっていいとも中国語』朝日出版社（陳1）
陳淑梅・劉光赤 2010『しゃべっていいとも中国語2－ステップアップ編－』朝日出版社（陳2）
三潴正道・陳祖蓓 2013『時事中国語の教科書』朝日出版社（三潴）
楊凱栄・張麗群 2006『中国語へのアプローチ』朝日出版社（楊1）
楊凱栄・張麗群 2007『中国語へのアプローチⅡ』朝日出版社（楊2）
葉紅・飯島啓子 2012『対話でたのしむ中国語－初級編－』駿河台出版社（葉1）
葉紅・飯島啓子 2013『ステップアップ　対話でたのしむ中国語』駿河台出版社（葉2）

付記

本研究は首都大学東京平成25年度傾斜的研究費（若手奨励研究費）「日本語の「名詞＋助詞」と中国語の“介词＋名词”の対応関係に関する体系的な研究―「視覚的」な中国語の語順の学習法開発の一環として―」（研究代表者 劉志偉）の助成による研究成果の一部である。